ターキ・ブスターン大洞のアナーヒター女神像の意義
――フヴァルナーと王権の関係に関する再考察――

田　辺　勝　美

はじめに

筆者は曾て『岡山オリエント美術館研究紀要』第 2 号（1982 年）に「タ－ク・イ・ブスターン大洞彫刻研究――図像学及びイコノロジー的試論――」を発表し、この大洞（図１）は、624 年にビザンツ皇帝ヘラクリウス（Heraclius）によって破壊されたタフティ・タクディース玉座（Takht-i Taqdīs、アーチの形をした玉座、ホスロー2 世の玉座ともいう）を再建したものであると結論した[1]。更に 10 年後、筆者は古代オリエント博物館情報誌『オリエンテ』第 5 号（1992 年）に「泉池、川とササン朝の王権神授」と題するエッセーを寄稿した[2]。これは、「なぜササン朝の摩崖浮彫が川や池、泉など水の近くにあるのか」という問題を考究した小論であるが、その中で当然、ターキ・ブスターン（Taq-i Bustan）の 3 点の浮彫（アルダシール 2 世叙任式図、シャープール 2、3 世の並立像、ホスロー2 世ないしアルダシール 3 世の叙任式図・騎馬像・猪狩と鹿狩図）が泉の傍らに存在する意義に言及した。無論、岩壁から湧き出る泉（水源）は、1840 年頃にターキ・ブスターンを訪れ、遺跡の実測と摩崖浮彫などのスケッチ（図２）を行った E・フランダン（Flandin）が「遺跡の前面には、同じ場所から湧き出る幾つかの水源が水を供給する小川が流れている（un large ruisseau qu’alimentent plusieurs sources jaillisant au même lieu）」と記しているように、実際にはササン朝時代以前から今日まで存続していると考えられる[3]。筆者が 1976、1978 年にターキ・ブスターンで調査を行なった時にも、大洞の傍ら（向かって左側）の岩の隙間から新鮮な水が多量に勢いよく湧き出ていた。

1992 年に発表した小論では、プルタルコスの『英雄伝』中のアレクサンダー大王のペルシア征服に言及した記述に関するＧ・デュメジルの鋭い洞察を参考にして、「水の中にはフヴァルナー（xvarnah）が含まれているので、それを帝王が獲得することによって王位の正当性が公的に認知される」というイラン民族の伝統的王権観を明らかにした。フヴァルナーは多岐で難解な概念であるが、本稿では、富、幸運、栄光、王位、美貌など人間にとって良いものの総称とする H・W・ベ

---

[1] 田辺勝美「タ－ク・イ・ブスターン大洞彫刻研究――図像学及びイコノロジー的試論――」『岡山オリエント美術館研究紀要』第 2 号、1982 年、61-113 頁。この見解は「王権の造形表現――タ－ケ・ボスターン大洞」季刊『文化遺産』第 13 号，2002 年、23-27 頁に要約されている。

[2] 田辺勝美「泉池、川とササン朝の王権神授」『オリエンテ』第 5 号、1992 年、16-21 頁。ササン朝の宮殿や摩崖浮彫が泉、池、川の近くにある理由はその後、イタリアの P・カリイェーリ（Callieri） が更に詳細に論じている、“Water in the Art and Architecture of the Sasanians”, *Proceedings of the 5th Conference of the Societas Iranologica Europaea*, edited by A. Panaino & A. Piras, vol. I, Milano, 2006, pp. 339-349, figs. 1-16.

[3] E. Flandin et P. Coste, *Voyage en Perse pendant les années 1840 et 1841*, Paris, 1851, t.1, Relation du voyage, p. 1, Planches, pl. 3. J. D. Movassat, *The Large Vault at Taq-i Bustan A Study in Late Sasanian Royal Art*, 2005, New York, p. 4. 本書は 1988 年にカリフォルニア大学に提出された博士論文であるが、筆者の研究をはじめ多くの先行研究をまとめた類の論考であるので、博士論文に値しない駄作である。

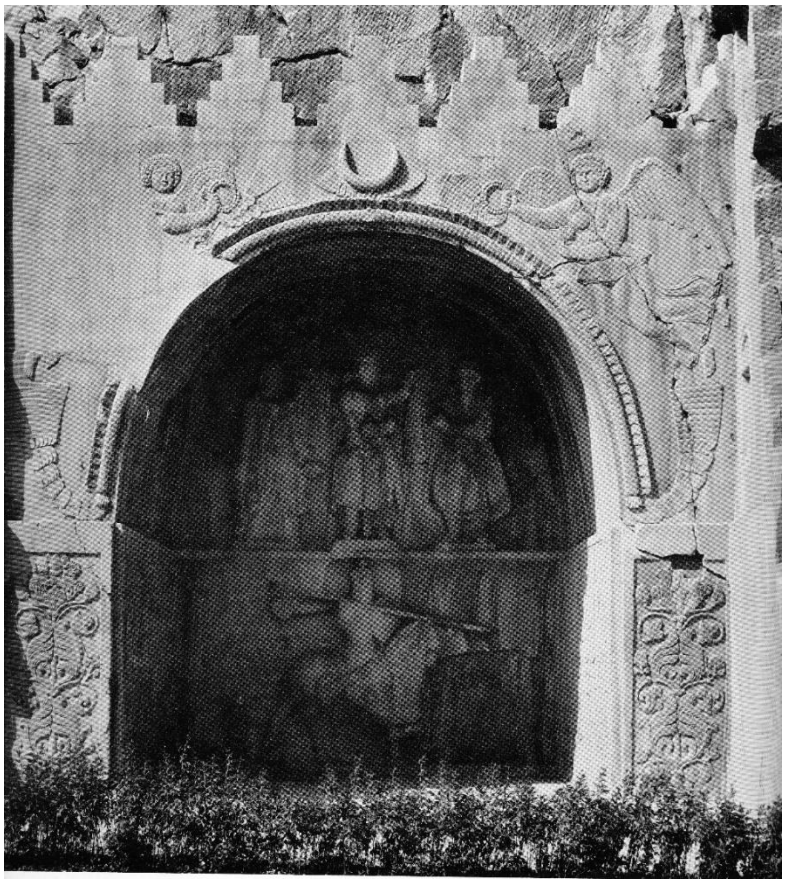

図 1　ターキ･ブスターン大洞彫刻

イレイ（Beiley）説を採用しておく[4]。

その後、2004 年に青木健が「サーサーン王朝の皇帝のイデオロギーとゾロアスター　アードゥル・グシュナスプ聖火とタフテ・タクディース王座の検討から」と題する出色の長論文を発表し、筆者の上記論文をも参照して、「タフティ・スライマーンの神殿とタフティ･タクディース玉座とターキ・ブスターン大洞との関連性」を扱った裨益するところ極めて大なる見解を提示した[5]。

一方、フヴァルナーないし水（āb）と洞窟との関係を扱った貴重な論文が二、三それ以後に発表されたことを最近知った。そして、これらの論文を読んだ結果、筆者が 1982 年、1992 年に下した結論が間違ってはいなかったという確信を持つに至った。しかし、上記の 2 点の拙論では、アナーヒター女神　（Anāhitā）が何故、大洞奥壁上段の叙任式・王権神授（図３）に参画しているのかとい

---

[4] H. W. Beiley, *Zoroastrian Problems in the Ninth-Century Books*, Oxford, 1971, pp. v-lii, 1-77; A. Tzatourian, Yima: Structure et la pensée religieuse en Iran ancien, Paris, 2012, pp. 69-103; 最新の論考としては、K. af Edholm, “Royal Splendour in the Waters, Vedic Śrī- and Avestan Xvarənah-”, *Indo-Iranian Journal*, vol. 60, 2017, pp. 21-31, インド語 Śrī/Srī=Xvarnah.

[5] 青木　健「サーサーン王朝の皇帝のイデオロギーとゾロアスター　アードゥル・グシュナースプ聖火とタフテ・タクディース王座の検討から」『東洋史研究』65 (3)号、2006 年、614−538 頁。

う問題については、十分な考察を行うことができなかった。すなわち、国王の叙任式がタフティ・スライマーン（Takht-i Suleiman）のアナーヒター女神殿で行われたということを指摘する以外、この女神と大洞との直接的関係を具体的に解明するには至らなかった[6]。それ故、本稿において、大洞におけるアナーヒター女神の存在理由を明らかにし､筆者のターキ・ブスターン大洞に関する図像学的及びイコノロジー的研究を完結したい。

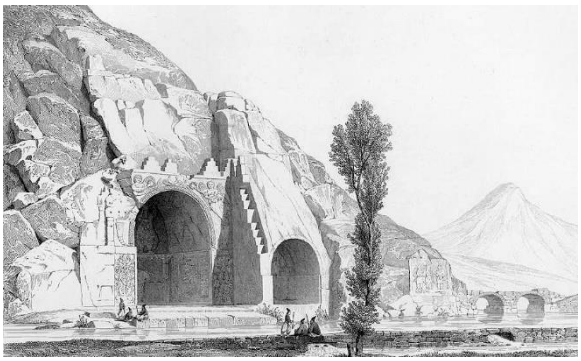

図 2　E・フランダン（Flandin）によるターキ・ブスターン遺跡のスケッチ

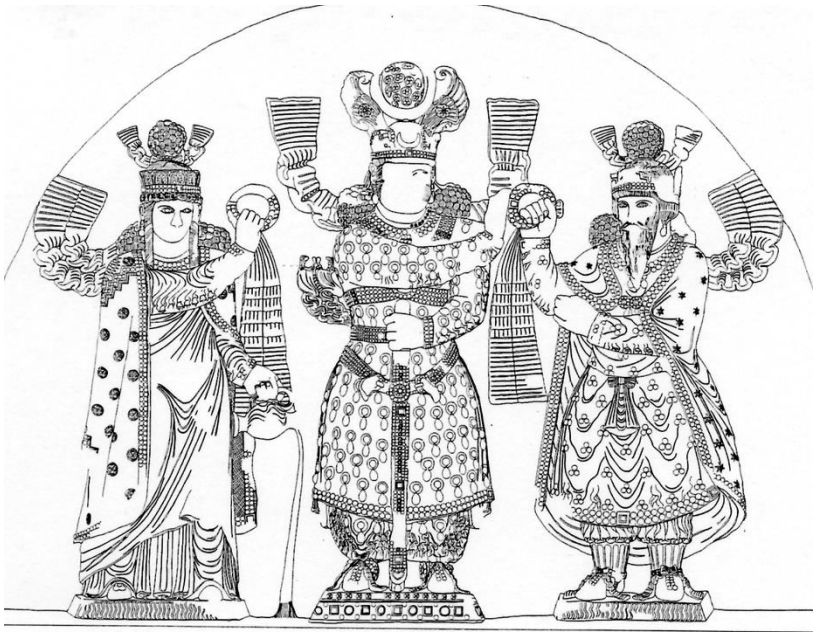

図 3　ターキ・ブスターン大洞奥壁上段の叙任式・王権神授（描き起こし図）

[6] 田辺　前掲論文（1982）、77-78 頁。

1　水と正当な王権との関係

まず、プルタルコスの『英雄伝』第九冊、第 17 章 のアレクサンダー大王の章の記述から始めよう。大王はグラニューコス河の戦いで勝利を収めた後、再度ダリウス 3 世との決戦のために南下し、小アジアのリュキアー地方（Lycia）のクサントス（Xanthus）の町に到った。

「さて、リュキアーのクサントスの付近に泉が有ったが、この時それが自然に沸き返って、底から古風な文字を刻んだ青銅の板を流出させ、それにペルシャの支配権がギリシャ人によって倒されて終になると明らかに書いてあったそうである」[7]。

G・デュメジルはこの短い記述に着目し、上記の「支配権」は、ペルシア人にとっては正当な王位・王権であって、それがアケメネス朝ペルシアからアレクサンダー大王に移行することを明言していると解釈した。この支配権はペルシア人のいうフヴァルナー（xvarnah はアヴェスタ語、古代ペルシア語では farnah、パーラヴィー語では xwarrah、ソグド語では farn、バクトリア語では φαρρο という）で、それは換言すれば「天命（mandat céleste）」に他ならないが、最初は地下水の中に隠されていたが、アレクサンダー大王と共に小アジアの地表に現れたというのである[8]。デュメジルが、フヴァルナーが水中にあると理解していたのは当然のことで、それは、ゾロアスター教の聖典『Avesta』の Yašt 19「Zamyād-Yašt」が記すフヴァルナー（カイ王朝のフヴァルナー、kauuaiia xvarənah、kayān xwarrah と axvarətəm xvarənō の二種類）の変遷を参照すれば一目瞭然であるので、以下にその変遷を略述しておこう。

アフラ・マズダー神が創造した（カイ王朝の）フヴァルナーは先ずイマ王（Yima, インドでは Yama=焔魔大王）が手に入れ、楽園を支配した。やがてイマ王が虚言を弄するようになると、フヴァルナーは鳥の姿をして彼のもとから飛び去ったので、イマ王は玉座を失った。イマ王から去った鳥は隼の姿をしてミスラ神のもとに到った。更に、イマ王の元から再度フヴァルナーは隼の姿をして去り、英雄のスラエータオナ（Thraētaona）のもとに到った。フヴァルナーはまた（三回目）イマ王のもとから隼の姿をして去り、英雄のクルサースパ（Kərəsāspa）のもとに至った。

次に、「入手しがたいフヴァルナー（axvarətəm xvarənō）」の争奪戦が善なる火神（Āthar）と悪なる龍神アジ・ダハーカの間で繰り広げられた。その結果、フヴァルナーはウォルカシャ海（Vourukaša）の底に身を隠した。水神アパーム・ナパート（apām napāt）は海底に行き、フヴァルナーを手に入れた。やがて、非アーリヤ人のフラングラスヤン（Frangrasyan）が三度、海中に入ってフヴァルナーを手に入れようとしたので、フヴァルナーは海底から去って逃れた。そこで、海水の放出口としてハオスラヴァー（Haosravah）、ヴァンガズダー（Vanghazdā）、アウズダーヌヴァ（Awzhdānuua）という三つの湖が現れた[9]。一方、フヴァルナーはアフガニスタン南西部のヘルマンド河（Helmand=Haētumaṇt）及び、それが流れ込むハームン湖（Hāmūn, Kąsaoiia）に存在すると記されている[10]。

---

[7] 河野与一訳『プルターク英雄伝』（九）、岩波文庫、1956 年、28 頁。
[8] G. Dumézil, *L'oubli de l'homme et l'honneur des dieux*, Paris, 1985, pp. 238-239.
[9] H. Humbach, and P. R. Ichaporia, *Zamyād Yasht*, Yasht 19 of the Younger Avesta, Text, Translation, Commentary, Wiesbaden, 1998, pp. 37-48.
[10] A. Hintze, *Der Zamyād-Yašt*, Edition, Übersetsung, Kommentar, Wiesbaden, 1994, pp. 20-22.

このようにフヴァルナーは天上のウォルカシャ海から水（雨）と共に地上に降下して湖や河の中にあったり、あるいは地下水と共に一端地中に入り再び泉から地上に現れると考えられていたのである。先に挙げた『英雄伝』では更にアレクサンダー大王が海に向かったと述べられているが、これもフヴァルナーが海（水）の中にあるという古代イランの信仰がクサントゥスに伝播していたことを示している。同じように海とフヴァルナーとの密接な関係が、ササン朝の開祖アルダシール1世の英雄譚『Kārnāmag ī Ardaxšēr ī Pābagān（バーバグの子アルダクシールの行伝）』にも述べられている[11]。また、水中にあったフヴァルナーは最初、水神のアパーム・ナパートが所持するところであったが、やがてアナーヒター女神にとって代わられた[12]。

2　洞窟と水、泉

一方、水は洞窟の内にも湧き水があるので、洞窟内でアーブ・ゾーフル（Āb-zōhr、聖水への献納）というゾロアスター教の儀式に匹敵するような民間儀礼が行われた[13]。また、アナーヒター女神に捧げられた賛歌「アーバーン・ヤシュト」（Ābān Yašt 、Yašt 5、アルドウィー＝スール・ヤシュト）によれば、全ての水はアナーヒター女神に関係する[14]。そして、ゾロアスター教徒は水がフヴァルナーを保持していると見なしていた[15]。

テヘランの南西、聖地コムないしカシャーン近くのヴェシュナヴェー（Veshnaveh）の洞窟（Chāle Ghār）（図４）は青銅器時代以降、銅の採掘場であったが、パルティア時代からイスラム初期にかけて、多くの巡礼者が訪れ、様々な容器、装身具、食物、植物などを奉献していた事実が、ドイツの調査団などの発掘によって解明された[16]。出土遺物の大半はパルティア・ササン朝時代のものであるが、注目すべきは9枚の金ないし銀の板に植物文（水と関係深い）や「女性と植物文」が表現されていることであろう[17]。これらは所謂オクサス遺宝やミル・ザカー（Mir Zakah）遺宝の奉納用金板を想起せしめるように、他でもない神ないし神殿への奉納物であって、具体的には聖水を清めるために信者が奉納した献納品で、パーラヴィー語で記された儀礼書『Nīrangistān』などに述べられている ゾロアスター教のアーブ・ゾーフルの儀式における奉納物に匹敵する[18]。ヴェシュナヴ

---

[11] 伊藤義教『古代ペルシア』岩波書店、1974年、306頁; F. Grenet (tr.) , *La Geste d'Ardashir Fils de Pābag Kārnāmag ī Ardaxšēr ī Pābagān*, Die, 2003, p. 75.
[12] A. Soudavar, *The Aura of King. Legitimacy and Divine Sanction in Iranian Kingship*, Costa Mesa, 2003, pp. 52-56.
[13] J. Rose, "In praise of the good waters: continuity and purpose in Zoroastrian lay rituals", *Archäologische Mitteiliungen aus Iran und Turan*, Bd. 43, 2011, pp. 143-146.
[14] 岡田明憲『ゾロアスター教』平河出版社、1982年、52-135 頁。
[15] P. Callieri, op. cit., pp. 343-346; K. af Edholm, op. cit., pp. 24-28. イランには多くの鉱泉（温泉と冷泉）があるので、古来から水治療法が行われていたようである、S. S. Mosavi Jashni et al., "Politics of hot and mineral springs and Anahita: A short study in Parthian and Sassanian period", in P. Nabarz (ed.), *Anahita Ancient Persian Goddess & Zorostrian Yazata*, London, 2012, pp.184-189. この鉱泉と水治療法も民間のアナーヒター女神信仰に関係していよう。
[16] Th. Stölllner and M. M. Eskanderi "Die Höhle der Anāhitā ? Ein sassanidischer Opferplatz im bronzezeitlichen Bergbaugebiet von Veshnaveh, Iran", *Antike Welt*, Bd. 34, 2003, pp. 505-516, figs. 6-12.
[17] Th. Stölllner and M. M. Eskanderi, ibidem, p. 513, fig. 11; J. Ross, op. cit., pp. 142-143, figs. 1, 2.
[18] Ph. G. Kreyenbroek, "Some remarks on water and caves in pre-Islamic Iranian religions", *Archäologische Mitteiliungen aus Iran und Turan*, Bd. 43, 2011, pp. 157-163; J. Rose, op. cit., pp. 141-148, figs. 1-6. B・オヴェルラエトは、Veshnaveh の洞窟は雨乞いの儀式に使われたと見なしているが、筆者はその説には与しない、B. Overlaet, "Čāle Ǧār (Kāšān Area) and votives, *favissae* and cave deposits in pre-islamic and islamic traditions", *Archäologische Mitteiliungen aus Iran*

ェーの洞窟には池ないし水溜まりがあって、そこに巡礼者は牛乳など様々な献納物を投げ入れて、家族の健康と安寧（haurvatāt）、長寿（amərətāt）を祈願したのである[19]。このような行為は聖水、豊穣、多産を司る女神アナーヒターに対する民間信仰と見なすことができるが、一方、ビーシャープールのム（ン）ダン（M(u)ndan）の 洞窟 (図５)——入り口に高さ 8m のシャープール 1 世立像が彫刻され、奥には泉及び多くの小さな貯水槽がある——では、ゾロアスター教のアーブ・ゾーフルの儀式に則った奉納の儀礼が公式に行われていたと思われる[20]。即ち、洞窟、その内の水源、泉、溜まり水、洞窟から湧き出る水は民間信仰のみならず、王権や正当な王位（xvarnah）と結びついていたのである。

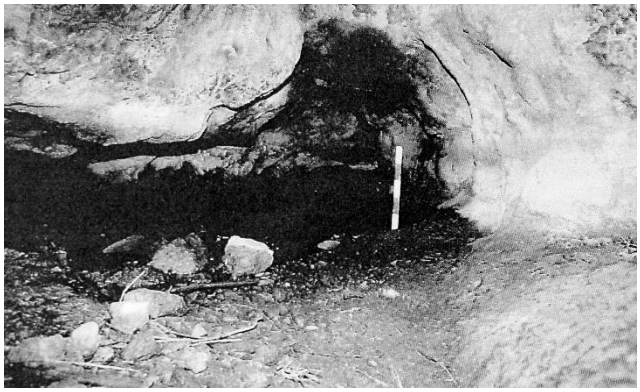

図 4　ヴェシュナヴェーの洞窟

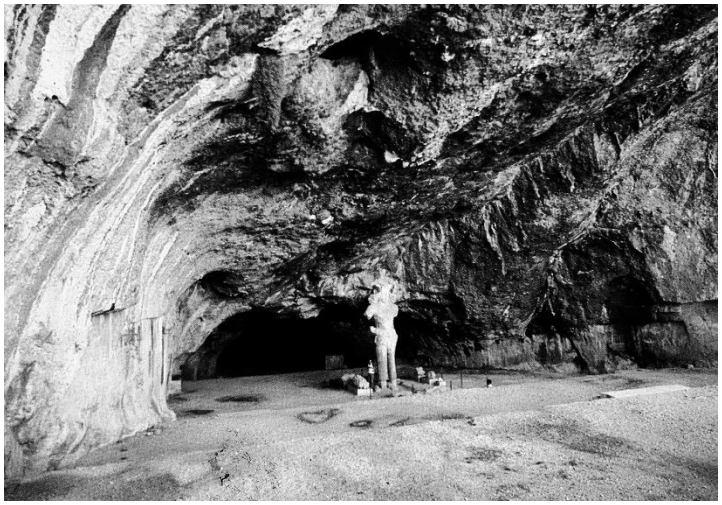

図 5　ビーシャープールのム（ン）ダン 洞窟、シャープール 1 世立像

---

und Turan, Bd. 43, 2011, pp. 113-139.アフガニスタンのミル・ザカーの遺宝は泉の底から二度にわたって発見されている、O. Bopearachchi and Ph. Flandrin, *Le portrait d'Alexandre le Grand*, Monaco, 2005, pp. 11, 35, 102-112, 147-149. その一部は滋賀県の Miho Museum に所蔵されている、同館『古代バクトリアの遺宝』2002 年、78-98 頁、『オクサスのほとりより』2009 年、23-27 頁。

[19] J. Ross, op. cit., p.141; N. B. Kashani and Th. Stöllner, "Water and caves in ancient Iranian religion: aspects of archaeology, cultural history and religion, preface", *Archäologische Mitteiliungen aus Iran und Turan*, Bd. 43, 2011, p.1.

[20] J. Ross, op. cit., p.145; Th. Stöllner and M. M. Iskanderi, ibidem, p. 512, fig. 15.

3　神殿と水、泉、池

イラン北西部のタフティ・スライマーン（Takht-i Suleiman、Shīz）は海抜 2000 メートルの高地にある火山の噴火口であるが、中央に 80x100 メートルくらいの円形のカルデラ湖が残っている[21]。このカルデラ湖は水深 60 メートルくらいで、二つの泉（水源）があり、その一つは温泉で､その畔にはアードゥル・グシュナスプ（Ādur Gušnasp の聖火、戦士階級の聖火）が祀られていたと、9 世紀にザートスプラム（Zātspram）が著した祈祷書（Anthology）『Vizīdagīhā i Zātspram』 III、 24 には述べられている[22]。現在のタフティ・スライマーンの遺跡（図６）にも、大きな泉池が存在し､アードゥル・グシュナスプ聖火を祀った拝火神殿遺構が存在している。ただし、アナーヒター女神殿は確認されてはいないが、拝火神殿の周辺（図７）には幾つかの建物があるから、どこかで聖水ないしアナーヒター女神に対するアーブ・ゾーフルなどの儀式が行われていた可能性を否定できない。R･ゲーブルが述べているように､アードゥル･グシュナスプ拝火神殿コンプレックス（complex）のどこかに「アナーヒター女神殿」があったのではないか留意すべきであろう[23]。

図 6　タフティ・スライマーン遺跡

---

[21] H. H. von der Osten and R. Neumann, *Takht- i Suleiman, Vorläufiger Berichte über die Ausgrabungen 1959*, Berlin, 1961, pp. 20-32, 36-38, pls. 1-fig. 3, 4, pls.1, 2, plan 8; ead., *Die Ruinen von Tacht-e Suleiman und Zendan-e Suleiman*, Berlin, 1977, pp. 30-71, figs. 11-50, Beilage I-3.

[22] アードゥル･グシュナスプの聖火を管理する神官の印章の印影が出土している､H. Humbach, “Ātur Gušnasp und Takht i Suleiman”, in G. Wiessner (ed.) *Festschrift für Wilhelm Eilers*, Wiesbaden, 1967, pp. 189-190; R. Göbl, *Die Tonbullen vom Tacht-e Suleiman*, Berlin, 1976, pp. 56, 81-82, pl. 47-703; B. T. Anklesaria, *Vichitakiha-i Zatsparam. With Text and Introduction*, pt. I, Bombay, 1964, p. 26.

[23] Göbl, *ibidem*, pp. 81-82; ただし、アナーヒター女神殿の存在は考古学的発掘結果によっては否定されている、R. Nuamann, “Takht-i Suleiman, Berichte über die Ausgrabungen 1965-1973”, *Archäologischer Anzeiger*, Bd.90, pp.128, 132.

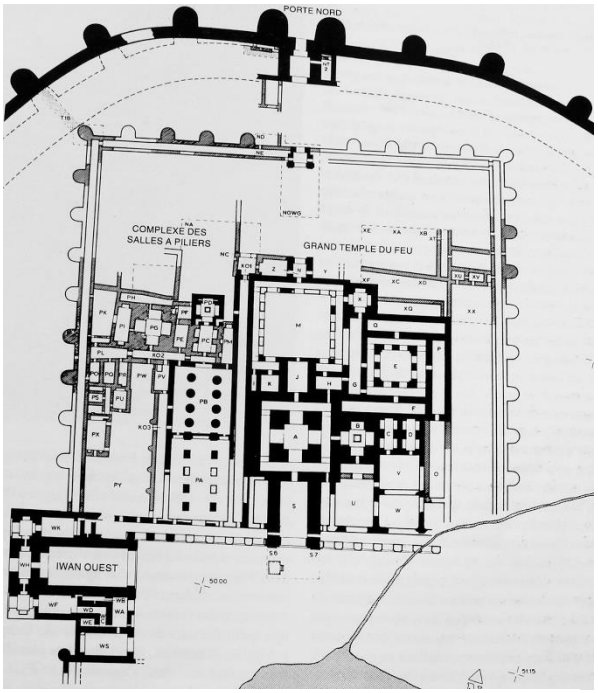

図 7　タフティ・スライマーンの拝火神殿コンプレックス

アナーヒター女神殿はイラン南部、ペルセポリス北方のイスタフル（Istakhr）にあって、ササン朝の祖先のサーサーン（Sāsān）ないしパーパク（Pāpak）がその神官（管理人）を務めていたと、イスラム初期の歴史家タバリー（al-Ṭabarī）は述べているが、アナーヒター女神殿の実体や泉、川との関係は全く不明である[24]。僅かに、シャープール 1 世（242-270）が創建した都市ビーシャープールの宮殿内の切石積みの神殿は外部から水を引き込む水路があるので、アナーヒター女神殿と比定されているに過ぎない[25]。また、イラン南部のダーラーブギルド（Dārābgird）に残るアルダシール 1 世ないしシャープール 1 世の騎馬戦勝図浮彫（図 8）の傍らには泉池があって、浮彫の下方の岩壁にアナーヒター女神の胸像（図 9）が刻まれているが、神殿などが建てられた形跡はない[26]。恐らく、タフティ・スライマーンには大きな泉池があるので、運河を用いて水を引いてくる必要もなく、アナーヒター女神殿も造られなかったのではなかろうか。ホスロー2 世（590-628）（図 10） からヤズドガルド 3 世（632-651）に至る数人のササン朝後期の国王が発行したコインの表には、「GDH ’pzwt（xwarrah abzūd、フヴァルナーが増大した、あるいは国王がフヴァルナーを増大した）」という銘文が国王の耳の背後に刻印されている[27]。このフヴァルナーはしばしば栄光（Glory, Splendor）と英訳されているが、正しくは「アーバーン・ヤシュト」（注 14 参照）がいうアナーヒター女神の職能――王国の豊かさと安寧（灌漑、家畜、耕地、富、領土を増大する）を司る――に他ならない。それらはいずれも水の存在を前提としている。また、ゾロアスター教は「拝火教」といわれるように聖火信仰が強調されているが、実際には水への信仰も火に劣らず大きな部分を占めているから、聖火があればアナーヒター女神に対する供養もあったと推定するのが妥当であろう。

---

[24] A. Christensen, *L’Iran sous des Sassanides*, Copenhagen, 1944, p. 86; K. Schippmann, *Grundzüge der Geschichte des Sasanidischen Reiches*, Darmstadt, 1990, pp. 11-12; C. E. Bosworth, *The History of al-Ṭabarī*, vol. V, New York, 1999, p. 4.
[25] R. Ghirshman, *Bīchāpour*, vol. II, Paris, 1956, plan II; ead., *Iran Parthes et Sassanides*, Paris, 1962, p. 149, figs. 189, 191.
[26] L. Vanden Berghe, “La découverte d’une sculpture rupestre à Dārābgird ”,*Iranica Antiqua*, vol. XIII, 1978, pp. 135-147, fig. pls. 1-4.
[27] 津村眞輝子他『新疆出土のサーサーン式銀貨』（シルクロード学研究、Vol. 19）、2003 年、41-47，285-309 頁; R. Gyselen, “New Evidence for Sasanian Numismatics : The Collection of Ahmad Saeedi”, *Res Orientales*, vol. XVI, 2004, pp. 64, 128-135.

図 8　アルダシール 1 世ないしシャープール 1 世の騎馬戦勝図浮彫、ダーラーブギルド

図 9　アナーヒター女神の胸像
ダーラーブギルド

図 10　ホスロー2 世のコイン

おわりに

以上の考察から、ターキ・ブスターン大洞奥壁上段のアナーヒター女神像は、王権神授の象徴たる「リボン・ディアデムで飾られた環（フヴァルナー）」の他に、聖水を象徴する水瓶を持っているので、大洞の傍らから湧き出る聖水に含まれるフヴァルナーを国王に格別に授与していることが判明しよう。この点において、「リボン・ディアデムで飾られた環（フヴァルナー）」だけを国王に授与するアフラ・マズダー神による「王権神授」（王位の正当性？）とは一線を画している[28]。大洞の傍らから流出する水（フヴァルナー）は、先ず、ウォルカシャ海から雨となって地上に落下し、次に大地に吸収され、やがて地下水として地下の洞窟に蓄えられ、そこから岩の隙間を通して再び地上に湧き出るものである。即ち、ターキ・ブスターン大洞奥壁上段のアナーヒター女神像は、岩壁から滾々と湧き出る聖水の視覚化、化身、擬人像であったといえよう。

一方、このアナーヒター女神像は泉池の傍らにあるのであるから、タフティ・スライマーンのアードゥル・グシュナスプ拝火神殿コンプレックスの水源及び泉池（アナーヒター女神信仰）を想起せしめる。歴史的に見れば、タフティ・スライマーンの拝火神殿コンプレックスの傍らないし内部にあったと思われる[29]、ササン王家にとって不可欠の貴重な建物タフティ・タクディース玉座（ホスロー2 世の玉座）が 624 年にビザンツのヘラクリウス帝によって破壊されたので、その建物（玉座）及びササン朝の国王や王家のフヴァルナーを再興する必然性が生じた。ターキ・ブスターンの岩壁は聖水が湧き出る水源があるから、喪失したタフティ・タクディース玉座を再建するのに極めて適切な場所であったのは間違いない。それ故、水源に近い岩壁を掘削し、タフティ・タクディース玉座ないしそれに匹敵するものを大洞に再建したとしても何ら不思議ではない。掘削されたその大洞が次頁で述べる三職能のイデオロギーを可視化していれば、喪失した本来のタフティ・タクディース玉座の構造や図像と多少の相違があっても問題はなかったであろう[30]。無論、タフティ・スライマーンの拝火神殿コンプレックスにはアナーヒター女神殿がなかったかも知れない。しかし、たとえ存在しなかったとしても、豊穣多産を司どるアナーヒター女神は、ササン朝の凋落が顕著な時代にあっては、上述した銘文「GDH ’pzwt (xwarrah abzūd)」が示唆するように、ササン王家

---

[28] L・ヴァンデン・ベルヘによれば、ササン朝の摩崖に彫刻された所謂叙任式・王権神授図は、国王の戴冠式、即位式を図化したものではないので、リボンの付いた環（beribboned diadem）にもそのような意味はなく、それは神の威力を示す標識に過ぎないという、L. Vanden Berghe, “Les scènes d’investiture sur les reliefs rupestres de l’Irān ancien : evolution et signification”, in G. Gnoli et al. (ed.) , *Orientalia Iosephi Tucci Memoriae Dicata*, Roma, 1985, p.531. しかし筆者は、ナクシェ・ルスタムのナルセー王のアナーヒター女神による王権神授図を考慮すれば、リボンの付いた環は正当な王位を示す xvarnah で王権神授を象徴すると考える。図 3 のアナーヒター女神は王権神授の他に、豊穣多産・国家の安寧繁栄を司どるが、後者は水が流出している水瓶で象徴されている。

[29] 青木　前掲論文、597、608 頁。

[30] ホスロー2 世が造ったといわれる Takht-i Taqdīs の復元図についてはターキ・ブスターン大洞やイスラム初期の青銅製盆などの図像をモデルとする推察や復元が既になされている、Ph. Ackerman,“ Sāsānian Jewellery”, in A. U. Pope (ed.), *A Survey of Persian Art*, London/New York, 1938, vol. I, Text, pp. 777-778, vol. IV, Planches, pls. 235-237; L.– I. Ringbom, “Sasanian Salvers with Paridaeza Motifs, *ibidem*, vol. XIV, Tokyo/London, 1967, pp. 3029-3041, figs.1092-1094; ead., ”*Graltempel und Paradies, Beziehungen zwischen Iran und Europa im Mittelalter*, Stockholm, 1951, figs. 36, 109, 115; ead., *Paradisus Terrestris, Myt, Bild och Verklighet*, Helsingforsiae, 1958, figs.125, 186, 192, 194, 195, 196 ; E. Helzfeld, “Der Thron des Khosrô,” *Jahrbuch der Königlich Preussischen Kunstsammlungen*, Bd. 41, 1920, pp. 1-24, 103-147; 田辺 1982、93 頁、挿図 IX; 田辺 2002、23 頁、図 1。

にとって不可欠の存在であったから、それを大洞内に明示しないわけにはいかなかったのであろう[31]。何故ならば、アナーヒター女神は水神であるから、「アーバーン・ヤシュト」（注１４参照）が明記しているように大地の豊穣多産を司るという意味において、第三の生産者階級を代表する不可欠の神格でもある。奥壁上段（図 3）の中央の国王像は戦士階級、その向かって右のアフラ・マズダー神は神官階級を代表するから、奥壁上段の三者の存在によって、インド・アーリア（印欧）語族の伝統的なイデオロギーである「三職能説（idéologie tripartie）」を体現することができたのである[32]。また、国王は、筆者が既に上記拙論（1982 年）で指摘したように神官階級、戦士階級、生産者階級の代表者であるので、ササン朝の国王のフヴァルナーは、これら三階級及び Ērān（イラン人全体）のフヴァルナーより構成されているともいえよう[33]。

以上、タフティ・スライマーンの泉池、タフティ・タクディース玉座、ターキ・ブスターンの泉池、水、フヴァルナー、アナーヒター女神という一連のコンテクストを考慮すれば、この大洞におけるササン王家の三職能イデオロギーを完璧に図化、可視化するには、大地の豊穣多産という国家安寧の基盤を保障するアナーヒター女神像は不可欠であった、と結論することが許されよう。

図版出典

図 1 『国華』第 1033 号、1980 年、口絵 1

図 2 E. Flandin and P. Coste 1851, t.1, Planches, pl. 3

図 3 深井晋司他『Taq-i Bustan』III, 東京大学東洋文化研究所、1983 年、図版 IV

図 4 Th. Stölllner and M. M. Eskanderi 2003, p. 507, fig. 3

図 5 L. Trümpelmann, *Zwischen Persepolis und Firuzabad*, Mainz am Rhein, 1991, S. 29, Abb. 50

図 6 L. Vanden Berghe, *Splendeur des Sassanides*, Bruxelles.1993, p. 34, fig. 10

図 7 *Ibidem*, p.53, fig. 32

図 8 *Ibidem*, p.36, fig. 11

図 9 L. Vanden Berghe 1978, pl. IV

図 10 筆者蔵

---

[31] M・マレク（Malek） は、ホスロー2 世が発行した金貨と銀貨の裏面に刻印された、火焔頭光で荘厳された女性胸像をアナーヒター女神と比定しているが、その図像学的特色は、ターキ・ブスターン大洞奥壁上段のアナーヒター女神像（図３）とは異なるから、肯定できない、M. Malek, “The Sasanian King Khusrau II (AD590/1-628) and Anāhitā, ” *Nāme-ye Irān-e Bāstān*, vol. 2, no. 1, 2002, pp. 23-40, pls. 1-3. ホスロー2 世が発行したコインの裏面に刻印された火焔頭光の付いた女神像を包括的に考察した R・ギズラン（Gyselen）もアナーヒター女神説を否定している、R. Gyselen, ”Un dieu nimbé de flammes d’époque sassanide”, *Iranica Antiqua*, vol. XXXV, p. 303, figs. a, b, 1-11.

[32] G. Dumézil, *L’idéologie tripartite des Indo-Européens*, Bruxelles, 1958;ジョルジュ・デュメジル著・松村一男訳『神々の構造――印欧語三区分イデオロギー――』国文社、1987 年。

[33] M. Molé, *Culte, Mythe et Cosmologie dans l’Iran ancien. Le problème zoroastrien et la tradition mazdéenne*, Paris, 1963, pp. 453-454; P. Callieri, op. cit., p. 345.

Summary

Significance of the Anāhitā Image in the Upper Register of the Innermost Wall, the Larger Grotte at Taq-i Bustan

——Relationship between Xvarnah and Late Sasanian Kingship Restated——

Katsumi Tanabe

The aim of this article is to supplement the present author's two articles published in 1982 and 1992. In these articles I could not clarify the reason why the goddess Anāhitā was added to the investiture of the king by the Zoroastrian supreme god Ahura-mazdā. Therefore, in this article, I attempted to search for the *raison d'être* of the Zoroastrian fertility and fecundity goddess Anāhitā by taking into consideration a few archaeological reports and investigations of caves such as Veshnaveh in Central Iran.

Generally speaking, caves contain spring, source and reservoir and therefore were used as cultic place by Zoroastrian lay worshippers. The water in cave is underground water originally fallen from the mythical Vourukaša Sea in heaven and contains Xvarnah prerequisite to the Sasanian king of kings. The Xvarnah contained in the water is derived from the goddess Anāhitā whose function is bestowing fertility and fecundity to the Earth.

The Larger Grotte at Taq-i Bustan is hewn quite near a spring, and therefore the king in the Grotte can receive the kingly Xvarnah from the water and Anāhitā. This is the reason why Anāhitā was depicted next to the Sasanian king in order to give the Xvarnah to him who claimed that he has increased the Xvarnah (GDH).

Another reason is that the Larger Grotte was hewn for reconstructing the Takht-i Taqdīs (Throne of Khusrau II) at Ganzak (Shīz, modern Takht-i Suleiman) that had been destroyed by the Byzantine emperor Heraclius in 624 AD. The Takht-i Taqdīs had been constructed quite near to the caldera lake of Ganzak and therefore was intimately related to Anahitā, goddess of all the waters. Taq-i Bustan is endowed with a spring, source and pond that correspond to the two sources and the caldera lake of Ganzak. Both sites are related to Anāhitā, and eventually the image of Anāhitā was indispensable for conceptualization and visualization of the Royal Xvarnah at Taq-i Bustan.